都市型テント住居

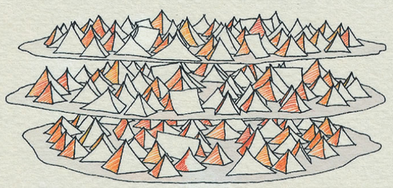
人の生活によって様相が移ろい、それによって街とコミュニケーションするような家、それが呼吸する家だと思う。
風が吹けば境界が揺らぎ、音や明かりで気配が漏れる。テントでの生活は他者との関係性の中に存在する。
集合することで都市においてテントでの暮らしを可能にし、さらに街に対してインパクトを持ち始める。
人の生活によって各住戸、さらには建築全体の様相が変わり、街の風景に変化をもたらし街とコミュニケーションする、都市型テント住居。

呼吸する家 / 街とコミュニケーション

もともと街並みは「公」がつくるものではなく、そこに暮らす人の生活によって彩られ、移ろうものであった。そのとき家は、街とコミュニケーションする装置でもあった。道行く人や隣家、街全体の雰囲気との関係性の中に存在していた家は、呼吸していた。

壁と窓から膜へ / 呼吸するイエ

例えばテントで過ごすと、風を感じ、音に耳を傾け、昼は明るくなり、逆に夜は周囲を照らす。周囲との関係性の中に自分を感じることが出来る。しかし、壁は他者を拒絶し、窓はこちらから相手を見るという一方向の装置である。
壁と窓の代わりに膜で暮らす。そこでの生活は、世界の中で他者を受け入れ、また自らも他者であると意識しながら生活する、呼吸する生活である。



膜での呼吸する生活が、個々の家を季節やその人の価値観、他者との関係性によって様々な様相を見せる、呼吸する家とする。そんな家たちが集まった、人の生活によって建築全体の様相が変わり、街の風景に変化をもたらし街とコミュニケーションするような、呼吸するイエを考える。

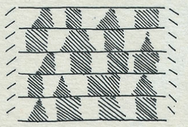
場所

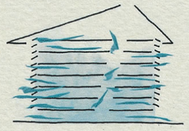
郊外にある団地。壁と窓による箱が積まれた変化のない風景が広がる。ここに、新しい街の風景となるような集合住宅を設計する。

ベンチレーション

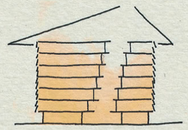
コンセプト
それぞれにテントを持ち寄って住み、それを補うように全体でゆるく空気をコントロールする。

システム
開閉する羽、屋根のトップライトと庇、1階ピロティからの中央の吹き抜けなどにより、膜での生活を支える。





夏　羽は開き、ピロティからトップライトまで風が抜ける。



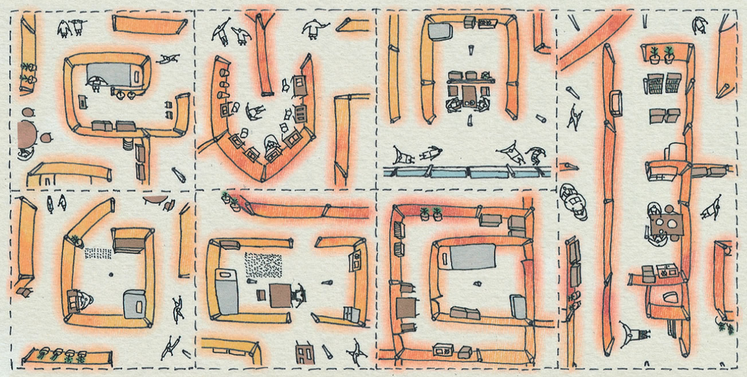
冬　羽は閉じ、吹き抜けには膜で筒をつくり、空気の流れを抑える。

膜と躯体

膜は、柱を手掛かりに、躯体と一体化する。さらに、柱間に膜用の梁を通すことで膜を吊ったり、構造体となる柱とは別に、棒を床と天井の穴に挿すことによって膜を固定する。

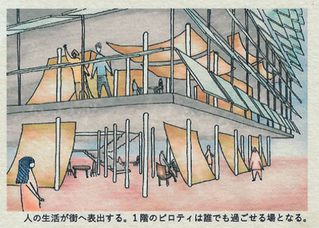
住戸プラン

様々な住戸プランには居住者の価値観が現れる。視線、空気、音、光、人など他者へのバランスを変化させる住戸。

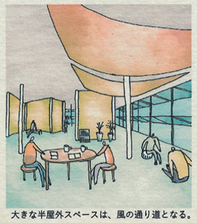


1	2	3	7
4	5	6	

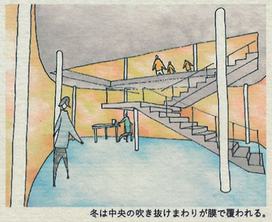
1: ベッドの部分だけ視線を避けている
2: 住戸間の子供たちの学習スペース
3: テラスの方にリビングを開いている
4: 少し外に開く、ベーシックな型
5: 開いてはいるけど領域を強調している
6: 2重にして、プライベートな空間が内に入っている
7: 視線の抜ける通りに沿ってスペースが配置されている



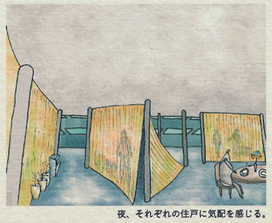
人の生活が街へ表出する。1階のピロティは誰でも過ごせる場となる。



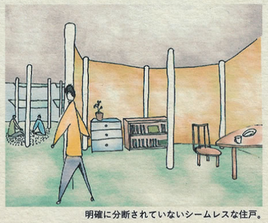
大きな半屋外スペースは、風の通り道となる。



冬は中央の吹き抜けまわりが膜で覆われる。



夜、それぞれの住戸に気配を感じる。



明確に分断されていないシームレスな住戸。

夏は外部を最大化し、冬は内部を最大化する

建築が服を脱ぎ着するように、季節によって様々な様相を見せる。
夏は内部を小さくし、住戸間に大きな半屋外空間が出来て、全体として多孔質な建築となる。

季節の知らせ

羽を閉じ、人が膜の中で過ごし始めると、幾重にも暮らしが重なり、まとまりを持った一つのイエとなる。街の風景は一変し、冬の訪れを知らせる。